

たが、漸く日本化して和様にも使はれる様になつた。臺輪鼻の形は割合に一定してゐて餘り變つたのではない、何れも其平面は「花頭窓」の輪廓のやうである。(大正九年八月十五日稿了)

紹介

●圖書

●神道起源論

津田敬武著

菊判洋装、二百七十餘頁、前後兩編に分ち第一編日本石器時代の宗教思想には當時既に一種の諸民族に共通する宗教思想の存在を認めべく、次の原始時代に入り成立せる特殊の神道の萌芽また存せしならむと云ひ、第二編神道の成立と原始時代の宗教思想にはこれを神代の範圍及び研究材料、カミなる言葉の意義と神名の解釋、古史神話に現はれたる宗教思想、文獻及び古墳に現はれたる靈魂觀と未來觀、天孫降臨の傳説と皇祖崇拜の意義、原始時代に於ける國事と宗教、神道の祭祀と其の社會化、天皇の稱呼及び天皇崇拜の形式等の各章に分ち種々の方面よりの觀察を載せ、最後にこれを總括して神道の由來を畧述せり。神道を論ぜる書は少からざるが中に本書の特色として擧ぐ可きは、其所論の資料の從

來行はれたる神話言語等に依る外上代の考古學上の事實を採れると、其の類例を廣く世界各地に求めて考案を下せる點とにあり。從つて此の方面に著者の創見の存するを見る。されどこは新しき試みなるが故に自らまた著者の再考を求む可きもの少しとせず。例へば第百十四頁以下に於いて著者は我が古墳發見の支那鏡の模様を論じて、これより其の鏡を使用せる上代人の宗教思想を窺はむとせる如きは、本邦人が鏡を表はれたる支那思想を了解せりとの例證なき限り、其の圖様の示す所は單に製作者の思想を表はすにさゞまるものと云はざる可らず、これを當代本邦にて模造せる古鏡に就いて見るに、大部分本來意味ある模様を何れも異形化して外形のみを模せるに過ぎず、此の點よりせば當代人は單に珍奇なるものとして鏡を愛玩せるのみと解せざる可らず。此の如き觀察よりも寧ろ鏡が墳に副葬せらるゝに當り如何なる位置に置かれたるか、其の副葬の意義の如きの考究に値すべきものなるを思はずんばならず。なほ書中收むるところの圖は概れ不鮮明にして、また引用の考古學上の事實にも不充分なる點(例へば第十二頁以下七十五頁七十八頁八十一頁其他)往々存するが如し。是等は他日改版の際補訂を期待するものなり(大鏡閣發行三七〇)(梅原)

●經濟史研究

法學士 本庄榮治郎著

本書は著者が従來京都法學會雜誌、經濟論叢等の諸雜誌に發表せし論文の内容形式等に多少の改訂を加へて、經濟發達階段說、徳川時代の經濟學者本多利明の研究、徳川時代の人口政策、徳川時代の米問題、徳川時代の酒造政策、徳川時代の壟斷屋、飛脚の